

C

近代文学の中にこれほど「観相」を扱ったものが多くあることが示されており興味深かったが、もう少し細かく具体的に触れてほしかった。また、三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』の中には「観相」をする人が出てくるが、円朝は別の著作『真景累ヶ淵』では、この非科学的な話は現代では通用しないと言及する。このように通用しないと言いながらも、「観相」の話をするようなパロディのような形態で話が成り立っていくという部分で、「観相」は生き続けているのではないかと感じる。したがって近代としての取り込み方、特殊性などにもさらに踏み込んで解析すれば、もっと良いと思う。

Q1

今回の発表は、前近代から近代へ移行していく中で、「観相」というものを見る目の違いがどのように変化しているのかを前提として説明した方がより理解が深まると思うが、その点に関しどのように考えるか。

A1

確かに前近代、近代含め「観相」に関する多くの文献が出ているが、その量は膨大であり、通史として「観相」の文学に現れた言説でも、詳細に全体を追って語る事はなかなか難しい。

Q2

近代に入り「観相」をつかまえ直して、文学表現の中の便利なツールとして利用していくという流れが、どこを契機として生まれるのか、あるいはどこが発端となるのか。

A2

今回の発表でこだわったのは、科学なのか科学でないのかという問いが浮かび上がってくるということである。明治期に近代自然科学の影響が文学でクローズアップされるようになっており、科学であることに価値があるという社会的な傾向も相まって、「観相」の見方が少しずつ変化していくというところを一つの契機と捉えて発表した。

Q3

仏教経典やヒンズー教経典では、「観相」に関する要素が多く、それが中国に流入した後、中国経由で日本に入るが、これについてインドとの関連はあるのか。

A 3

仏教の仏典と「観相」の問題が深く関わるということで、仏教との関わりが考えられると思うが、現段階では十分返答できる準備にない。

Q 4

「観相」は『源氏物語』にも描写があるということであったが、これ以外の中世や近現代以前にも関連ある作品は存在するか。

A 4

『源氏物語』以外にも『太閤記』など、近現代以前にも関連作品はある。

Q 5

「観相」は科学か非科学かといった議論があったが、ここでいう科学とはどういう意味か。例えば我々が科学というと、客観的な尺度で測れるものであり、第三者が見ても同じ結果が出るようなことを考えるが、そういう意味で科学か、非科学かという議論なのか、あるいは違う意味なのか知りたい。

A 5

「観相」観察・データ収集・分析という部分が、もともと「観相」も含まれているという点で、ご指摘いただいた科学という意味に沿っていると考える。その上で、「振幅」に関しては、骨相楽・生物学・近代自然科学の部分と摺りよっていくという観点から、もう少し整理して話をすべきだった。